エンパワーメントに基づく ソーシャルワーク実践の検討*

三　毛　美予子**

はじめに

エンパワーメントの概念は曖昧で一致した定義がないといわれている。それは、フェミニスト・ソーシャルワーク（feminist social work; Bricker-Jenkins & Lockett, 1995）、進歩的ソーシャルワーク（progressive social work; Bombyk, 1995）、強さの視点（strengths perspective; Saleebey, 1996）、生活モデル（life model; Germain & Gitterman, 1995）、非差別的実践（anti-discriminatory practice; Neil, 1996）、アドボカシー（Mickelson, 1995）などのソーシャルワークのアプローチに、エンパワーメントが重要な下位概念として統合されている一方で、エンパワーメントを基本理念とした実践理論も提唱されていることに起因するだろう。また、生活モデルといえばジャーメインとギッタマン（C. B. Germain & A. Gitterman）というように、単一の論者が理論を確立したのではなく、ソロモン（Solomon, 1976）にはじまり、ギタレット（Gutiérrez, 1990）、コックスとパーソンズ（Cox & Parsons, 1994）、サイモン（Simon, 1994）、ブレットン（Breton, 1994 ab）、リー（Lee, 1995）、デュボアとマイリー（DuBois & Miley, 1996）など、さまざまな論者がエンパワーメントに基づく実践理論を構築していることも、エンパワーメント論をめぐる様相を複雑にしている。

したがって本稿は次の2点を主要な目的として書かれた。第1に、さまざまな論者の主張から共通点を抽出し、アメリカを中心とするエンパワーメントに基づくソーシャルワーク実践の本質を理解することである。そのために、エンパワーメント実践隆盛の背景と内容、および、エンパワーメント実践と他のソーシャルワークの理論との関連について論じている。エンパワーメント実践理論と他のソーシャルワークの理論との関連は、日本ではまだ十分に検討されていない。第2の目的は、エンパワーメント実践の内容の理解に基づいて、この実践理論の限界や問題点、日本に適用するにあたっての問題点を検討することである。日本の先行研究では、この点は十分に議論されていない。

Ⅰ．エンパワーメントの概念隆盛の背景

アメリカにおいて1976年に発刊されたソロモン（B. B. Solomon）の著書 *"Black Empowerment"* のなかで登場したエンパワーメントの概念は，1980年代に一部の論者の実践アプローチに統合されはじめる（Simon, 1990）。1990年代に入るとエンパワーメントにかんする文献の増加は著しく、また、ソーシャルワークはエンパワーリングでなければならないと主張されるにいたる（窪田, 1995）。また、イギリスでも1980年代後半からエンパワーメントがさかんに主張されるようになった（Adams, 1996）。その背景には、アメリカでは80年代の政治的保守化の結果生じた社会状況に対応することの少なかったソーシャルワークに対する批判と、英米両国ともにソーシャルワーカーとクライエント関係の問い直しがあると考えられる。

*キーワード：エンパワーメント、ソーシャルワーク、援助関係
**関西学院大学社会学研究科博士課程後期課程

1．1980年代のアメリカ社会とソーシャルワークに対する批判

アメリカでのエンパワーメント実践隆盛を語る際に、1980年代から90年代のレーガン、ブッシュの共和党政権の存在を抜きにすることはできない。両政権の財政政策や社会サービスへの財政支出削減のため貧富の差が拡大、また、人種問題も緩和されることはなく、非白人の人々のほか、女性や移民もその市民権が縮小される（Simon, 1994）。つまりこの時期に、連邦政府が社会福祉や社会サービスの費用を提供し、人々の基本的な生活水準を保障するという、アメリカのソーシャルワーカーの多くが信ずるリベラルな理想が打ち砕かれた（Popple & Leighninger, 1993）。

この間、つまり、1980年代のアメリカのソーシャルワーク界で主流であったのは、臨床実践、ケースワーク、生態学アプローチであった（Dodd & Gutiérrez, 1990；Larid, 1995；Popple & Leighninger, 1993）。そして、心理療法やケースワークを用いて実践を行う個人開業のソーシャルワーカーが急増した時期であった（伊藤淑子，1996）。

こうしたソーシャルワークの潮流に対し、エンパワーメント論者から痛烈な批判がなされている。たとえばカウガー（Cowger, 1994）は、臨床実践では、人と環境の相互作用に焦点をあてるといいつつも、社会的経済的公平を促進するというワーカーの役割は主要な概念ではなく、実践の場でこの役割は果たされていないと述べている。ドッドとギタレット（Dodd & Gutiérrez, 1990）は、ケースワークはクライエントの問題を政治や社会構造と結びつけて理解するという視点に欠け、女性や貧困者や非白人のクライエントを阻害し混乱させるアプローチであると批判している。また、ソーシャルワークのほとんどのアプローチは、すべての人のためにといいながら、こうした人々に関心を払うことが少なかった（Lum, 1986、Lee（1995）の中で引用）。さらに、生態学アプローチや生活モデルについても、社会改革の視点に欠けているという批判や、クライエントの問題における社会的要因を認識できないといった問題点が指摘されている（Gould, 1987）。アメリカのソーシャルワークにおいてエンパワーメントの概念に対する関心が高まった背景には、80年代の保守化の進行した社会のなかで、一層拡大した貧困・人種・ジェンダー等にまつわる差別や抑圧に対して、応えるすべをもたなかったソーシャルワーク界が、エンパワーメントという概念を基に、その対応を試みているということが読みとれるのではないだろうか。

2．ソーシャルワーカー・サービス提供機関とクライエントの関係のあり方への問い直し

アメリカとイギリスのソーシャルワークともに、サービス提供機関やソーシャルワーカーとクライエントの関係において、機関やワーカーがパワーを保有しすぎているという懸念と、それゆえに機関やワーカーとクライエントの均衡のとれた関係をめざすという視点から、機関やワーカーとクライエントの関係が問い直されたことも、エンパワーメント論隆盛の背景にあると考えられる。

アメリカでは、専門職としてのソーシャルワーカーと機関のもつパワーが、クライエントをパワーの欠如した状態（powerlessness）においやる可能性が指摘されている。アメリカの伝統的なソーシャルワークには、クライエントが話した内容を信じてはいけないという考えかたが存在し（Perkins & Tice, 1995；Pray, 1991）、専門的知識や技能を有した専門職であるワーカーがクライエントの状況や問題をラベリングし、決めることを重視する（Breton, 1994a；Cox & Parsons, 1994；Weick, Rapp, Sullivan, & Kisthardt, 1989）。しかしこれは、エンパワーメント論者によれば、専門家が援助プロセスをコントロールし、クライエントがパワーをなくす原因の1つである（Breton, 1994a；Ortiz, 1994）。さらに、人種、性別、性的志向、階級といった属性の違いから生じるワーカーとクライエントの不均衡な関係のために、クライエントが病理を持っていると診断されたり、犠牲者とみなされ、パワーの欠如した状態に陥る可能性があることが指摘されている（Gibson, 1993；Pinderhughes, 1994）。こういったことにもかかわらず、生活モデルをはじめとするソーシャルワークの理論では、ワーカーのもつパワーが生むクライエントとワーカーの不均衡な関係が十分に評価されていないとし、ハルトマン（Hartman, 1993）、ハッセンフェルト（Hasen-

feld, 1987）らはエンパワーメント実践の必要性を提唱している。

またイギリスにおいても、エンパワーメントの概念は、サービス提供者と利用者の関係のあり方を探るための重要な概念として、参加の概念とともに用いられている。イギリスのソーシャルワーカーは、福祉国家の目的を遂行するパワーを付与された代表的な専門家として位置づけられる（Parton, 1994；Payne, 1996）。一方、サービスを受ける市民は、参加の主体というよりも、社会的サービスの受動的な受給者として強調された（堀，1995；伊藤周平，1996）。しかし、1970年代後半、経済成長の停滞と財政危機を契機にポスト福祉国家を模索するなかで、サービス利用者の供給プロセスへの参加と利用者のエンパワーメントが主張されるようになる。これは、相互扶助、個人や家族の自助や責任を強調することによって、市民としての義務を訴える新保守主義の立場と（Howe, 1994；伊藤周平，1996；Parton, 1994）、参加的市民権の理念に基づいて、能動的で自立した個人の社会福祉行政・立法・計画過程への参加を保証するために、「社会福祉におけるサービス供給過程や決定過程へのクライエント参加の権利や手続きの保障、エンパワーメントを強調」（伊藤周平，1996, p. 185）する左派の立場から主張されている。しかしいずれの立場も、今後の社会サービスにおいては、①消費者や利用者がもっとも自分のニーズをよく知っていること、②消費者や利用者の参加が決定と計画の際には欠かせないこと、という共通の見解を示している（Parton, 1994）。

アメリカでは、エリート主義（伊藤淑子，1996）といわれるほどのソーシャルワーカーの専門性志向や、ワーカーとクライエントの性別や人種といった属性の差から生じるワーカーとクライエントの関係が、イギリスでは福祉国家によって強力なパワーを付与されたサービス提供者と利用者の関係が、エンパワーメントの概念と関連づけて問われている。また、エンパワーメント論の発展に、福祉国家における専門家のコントロールや介入に異を唱えた「新しい社会運動」（伊藤，1993；メルッチ，1989、山之内（1996）の中で引用）として解されている、ブラック・パワー運動、フェミニズム運動、障害者運動、ゲイ・レズビアン解放運動などが影響を与えている（Lee, 1995；Simon, 1994）ということからも、援助する専門職と援助される者の関係を問い直すという視点からエンパワーメントが主張されたということが裏付けられるであろう。

II．エンパワーメントに基づくソーシャルワーク実践とは何か？

エンパワーメントに基づくソーシャルワーク実践とはソーシャルワーカーがクライエントをエンパワーメントしたり、パワーを有したソーシャルワーカーがクライエントにパワーを与える実践ではない（Cowger, 1994；Cox & Parsons, 1994；Simon, 1994）。その根底には、人はどんなに悪い状況にあっても、自分の人生を変えることができるパワーや能力を持っているという人間観が含まれている（Cowger, 1994；Hasenfeld, 1987；Simon, 1990）。エンパワーメントに基づくソーシャルワーク実践とは、ソーシャルワーカーとクライエントの協働関係をもとに、クライエント自らが自身をエンパワーメントするのを助ける実践である（Simon, 1994）。ここでは、アメリカのエンパワーメント実践の文献で共通して示されているエンパワーメントの概念、実践の特徴、介入方法について説明する。

1．エンパワーメントの概念

エンパワーメントの概念は曖昧で一致した定義がないと言われている（Cohen, 1994）。たとえばエンパワーメントは、ソーシャルワークの価値（Ortiz, 1994）、介入（Pinderhughes, 1994）、個々の実践のゴール（Hartman, 1993）、プロセス（Bailey, 1994；Guitérrez, 1990；Hasenfeld, 1987）、専門職としてのソーシャルワークがめざすべき共通のゴール（Parsons, 1991）と解釈されている。

しかし、エンパワーメントの定義について、複数の論者が共通して示しているのは、「自分の生活を自分でコントロールしたり、自分の生活に影響する外的な要因に影響を与えること」という内容である。たとえばブレットン（Breton, 1994b）

は、「自分の生活に対するコントロールを獲得すること」とエンパワーメントを定義している。ハッセンフェルト（Hasenfeld, 1987）やステプルス（Staples, 1990）も、「クライエントが自身の環境や生活、運命をコントロールすること」をエンパワーメントの概念に含めている。また、トーレ（Torre, 1985、Parsons（1991）の中で引用）も、「自分の生活に影響する出来事や制度に参加し、コントロールし、影響を与えるプロセス」と表現している。

さらに、個々人が自分の生活を自分でコントロールしたり、自分の生活に影響する外的な要因に影響を与えるために、個人というミクロレベルから、より大きな政治・社会というマクロレベルの力を発展させるという内容も、共通して示されている。これは、個人・対人・政治レベルでのエンパワーメント（Cox & Parsons, 1994；DuBois & Miley, 1996；Gutiérrez, 1990； Lee, 1995；Meredith & Wells, 1994；Parsons, East & Boesen, 1994）、また個人的・社会的エンパワーメント（Cowger, 1994）と称されている。個人レベルのエンパワーメントとは、その人が望んでいるものを手に入れる能力（Gutiérrez, DeLois, & GlenMaye, 1995）、自己効用力感（self-efficacy；Breton, 1994a；Gutiérrez, 1990）、自己決定（Breton, 1994a；Cowger, 1994）、適応のための能力、対処（Lee, 1995）、コンピテンス（Pinderhughes, 1995）を発展させることを意味している。対人レベルのエンパワーメントとは、他者の考え・感じていること・行動のしかた・信じていることに影響を及ぼす能力や技能を向上させることである（Breton, 1994a；Gutiérrez et al., 1995；Lee,1995）。政治レベルのエンパワーメントとは、家族・組織・地域・社会といった社会システムにおける資源の分配に影響を及ぼす能力を発展させること（Gutiérrez et al., 1995）、ソーシャルアクションや社会改革をおこすこと（Breton, 1994a）である。社会的エンパワーメントとは、環境において、または、環境をつくりあげる際に、重要な役割を演じるための資源と機会を有すること（Cowger, 1994）を指すが、これは、対人・政治レベルのエンパワーメントに相当するだろう。

以上を統合すると、エンパワーメントは、「自分の生活を自分でコントロールしたり、自分の生活に影響する外的な要因に影響を与えるために、パワー・資源・能力と称されるその人の力を、個人というミクロから政治というマクロのレベルで発展させること」を意味すると考えられる。

では、人はどのようにエンパワーメントしたり、ミクロからマクロに至る力を発展させるのであろうか。それには、心理的変化と同時に、社会的経験を経ることが必要である（Gutiérrez, 1994）。その具体的な内容として、①自己を責める気持ちを軽減すること、②自己に対する肯定的な認識を高めること、③批判的意識を高揚させること、④技能を発達させること、⑤同じ問題を有した人々と関わること、が提示されている（Cox & Parsons, 1994；Gutiérrez, 1990, 1994；Lee, 1995）。

2．エンパワーメント実践の特徴

アメリカを中心とするエンパワーメント実践の文献を中心にレビューすると、共通して強調されている内容を次の6つに整理ができる：①対象となるクライエントの特徴とその状況の原因、②ソーシャルワーカーとクライエントの関係、③クライエントの強さを強調すること、④介入のレベル、⑤実践の目標、⑥クライエントの責任。

(1) クライエントの特徴とその状況の原因

エンパワーメント実践理論が対象とするクライエントは、抑圧された人々、スティグマを受けている人々とされている（Cohen, 1994；Hartman, 1993；Lee, 1995；Rose, 1990；Simon, 1994）。こういった人々を特徴づけるのは、パワーの欠如した状態である（Cox & Parsons, 1994；Gutiérrez, 1990；Parsons, 1991；Solomon, 1976）。人が社会的・政治的・経済的・文化的・歴史的なシステム、制度や構造との関係において（Breton, 1994b；Gibson, 1993；Hartman, 1993；Kondrat, 1995；Pinderhughes, 1995；Rose, 1990）、非応答性、歪み、過剰や欠如を経験すると、パワーの欠如した状態に陥る（Pinderhughes, 1983；Rose, 1994；Solomon, 1976）。つまり、社会資源をコントロールしたり獲得することが不可能になり（Breton, 1994b；Cowger, 1994；Gutiérrez, 1990；Simon, 1994；Solomon, 1976）、自分の生活にかかわる決定をくだすことが難しくなる

(Breton, 1994b)。それゆえ、自分を責め、否定的に自己を評価し、行動を起こせる力量のある人間と認識できず、可能性や潜在性を低下させる(Gutiérrez, 1990；Hasenfeld, 1987；Lee, 1995；Parsons, 1991；Rose, 1990)。パワーの欠如した状態は誰にでも起こりうるという考えもあるが(Parsons, 1991)、単なる心理的・対人関係上の問題ではなくて、歴史的にスティグマを受けている人々、つまり、人種、ジェンダー、階級、加齢によって、パワーの欠如した状態に陥っている人々に関心をよせる論者が多い(Lee, 1995；Pinderhughes, 1994, 1995；Simon, 1994)。

(2) ソーシャルワーカーとクライエントの関係

エンパワーメント実践では、パワーの視点からソーシャルワーカーとクライエントの関係が考察されたうえで、協働関係が望ましいワーカーとクライエント関係とされている(Cox & Parsons, 1994；DuBois & Miley, 1996；Gutiérrez, 1990；O'Melia, DuBois & Miley, 1994；Simon, 1994)。両者の関係をパートナーシップと表現する論者もいるが(Breton, 1994a；Hartman, 1993)、2つとも同じ内容を意味している(Poole, 1995)。

パワーの視点からソーシャルワーカーとクライエントの関係を考察すると、ワーカーのパワーはクライエントのパワーと比べると大きいと解される(Hartman, 1993；Hsasenfeld, 1987)。ワーカーのパワーの素は、機関や組織が提供する資源、専門職としての知識や地位、共感・信頼・ラポールといった対人関係上の技能、社会から付与され正当性を持つパワーである(Hartman, 1993；Hsasenfeld, 1987)。ワーカーは、専門職としての価値に基づき、クライエントの行動に影響を及ぼすための道具としてパワーを使うのだが(Hsasenfeld, 1987；Weick, 1982)、ワーカーのパワーはクライエントのエンパワーメントを阻害し、パワーの欠如した状態を強める可能性がある(Hartman, 1993；Weick, 1982)。これを阻止しクライエントのエンパワーメントを助けるためには、クライエントとワーカーがパワーを分かちあわなければならない(Dodd & Gutiérrez, 1994；Hartman, 1993)

ワーカーのもつパワーをクライエントと分かちあうには、ワーカーとクライエントの協働関係(collaborative relationship)の樹立が望ましい。協働関係には、参加者が均衡のとれた状態で、ともにプロジェクトに関与し、問題の解決に努め、それぞれの考えを尊重するという意味が込められている(Simon, 1994)。協働関係樹立のために、クライエントは、知識、資源、経験、潜在性、洞察力、技能などを持ったパートナーであるという認識を、ワーカーがもつことが求められる(Breton, 1994b；Cox & Parsons, 1994；Gutiérrez, 1990；O'Melia et al., 1994)。ワーカーとクライエントがアセスメントの内容に合意し(Cowger, 1994；Ortiz, 1994)、記録をクライエントに開示したり、クライエントがケース会議に出席することが言及されている(Cowger, 1994；Moreau, 1990)。さらに、ワーカーは、介入のプロセスで起こることや、自分の有している情報をクライエントに伝え、援助過程で自身が使う技能や知識を明らかにしなければならない(DuBois & Miley, 1996；Moreau, 1990；Simon, 1994)。また、サービス提供システムや機関を再編成することも必要とされている(Hartman, 1993；Hasenfeld, 1987)。

(3) クライエントの強さを強調すること

エンパワーメント実践のクライエントはパワーの欠如した状態にある人々だが、それは社会制度やシステムに起因するものであって、人々の弱さや欠点、病理が原因ではない。エンパワーメント実践理論は、人には状況を変えていく潜在性や能力があるという立場に立ち、人の否定的な側面より強さに焦点をあわせ喚起することを強調する(Browne, 1995；Cowger, 1994；Cox & Parsons, 1994；Gutiérrez, 1990；Jhonson, 1992；O'Melia et al., 1994；Simon, 1994)。

強さにはクライエントの個人的な強さと環境の強さが含まれる(Cowger, 1994)。個人的な強さは、能力、技能、資源、潜在性、動機づけ、情緒的強さ、自己効用力感と称される(Cowger, 1994；Gutiérrez, 1990,；Parsons, 1991；Pinderhughes, 1983；Simon, 1994；Weick et al., 1989)。環境の強さとは、家族ネットワーク、関係ある人々、組織、地域グループ、公的機関からもたらされる資源を意味する(Cowger, 1994；O'Melia et al., 1994)。

(4) 介入のレベル

エンパワーメント実践では、人と環境に二重の焦点をあてるという考えに基づいて、介入は、個人、家族、集団、組織、地域等、ミクロからマクロのレベルで行われることが強調されている(Gutiérrez, 1990；Lee, 1995；Parsons, 1991；Simon, 1994)。たとえば、ケースワーク(Parsons, 1991；Simon, 1994)、個人への教育(Browne, 1995；Pinderhughes, 1983)、グループワーク(Gutiérrez, 1990；Parsons, 1991；Simon, 1994)、家族に対するソーシャルワーク(Gutiérrez, 1990；Jhonson, 1992；Parsons, 1991；Simon, 1994)、ソーシャルサポートやセルフヘルプグループの運営(Browne,1995；Gutiérrez, 1990；Jhonson, 1992；Moreau, 1990；Rose, 1994；Simon, 1994)、ロビー活動、社会計画(Rose, 1994)、アドミニストレーション、プログラム開発(Simon, 1994)、コミュニティワーク(Lee, 1995)を行うことが示されている。また、エンパワーメント実践はマクロからミクロにいたる介入を含んだジェネリック・アプローチと解釈されている(Cox & Parsons, 1994；DuBois & Miley, 1996；Parsons, 1991；Simon, 1994)。

(5) 実践のゴール

エンパワーメント実践では、ミクロからマクロレベルの介入を強調し、クライエントの個人というミクロから政治というマクロレベルでのエンパワーメントに関心を寄せているが、理論上もっともめざすべき実践のゴールは、マクロの政治レベルでのエンパワーメントと位置づけられていると考えられる。その根拠は、前述したように、エンパワーメント実践は、従来のケースワーク・臨床実践・生態学アプローチに対する批判から出発していることにある。たとえばギタレット(Gutiérrez, 1994)は、対処の概念に基づいたソーシャルワーク実践は、人と環境の適合をよりよくするために、人を環境に適応させることを目標にしていると批判する一方で、エンパワーメント実践は、環境を変える方法に焦点をあて、かつ、社会政策や社会状況に影響を及ぼす方法を提示すると述べている。またロス(Rose, 1990)は、臨床実践は人々が経験している社会的現実や歴史的構造や社会関係を理解し変えようとせず、個人の経験のみを前提としていると批判し、社会的な領域を扱う実践として、アドボカシー/エンパワーメントを提唱している。またブレットン(Breton, 1994b)も、エンパワーメント実践は、資源とパワーのより公平な配分を獲得することをめざすと述べている。こうした論者が批判した点は、従来の理論や実践が、クライエントの状況や問題をマクロの社会構造と結びつけて考察することや、社会改革的な実践に欠けていることであった。さらに、エンパワーメント実践理論は、精神分析に基づくソーシャルワークが社会改革的な視点を欠いていることに異を唱えたラディカル・ソーシャルワークの影響を受けているという(Lee, 1995；Payne, 1991, 1996)。エンパワーメント論が主張されるようになったこのような経緯を振り返ると、エンパワーメント実践理論は、社会改革的な視点、つまり、政治レベルでのエンパワーメントを高次の実践目標として強調していると言えるのではないだろうか。

(6) クライエントの責任

ギタレット(Gutiérrez, 1990)、リー(Lee, 1995)、サイモン(Simon, 1994)は、エンパワーメントするためのクライエントの責任について述べている。問題解決の前提として、変化に向けて責任を持つという認識をクライエントが持たなければならない(Gutiérrez, 1990)。ただし責任とは、「人が何かをなすことができる」という可能性への信頼感に基づいて責任を求めているのであって、「できないために人を責める」という意味ではない(Richan, 1994)。また、責任を持つことによって、問題の原因は自分にあるとクライエントが自身を責めることを軽減することができる(Gutiérrez, 1990)。また、地域の一員としてクライエントが義務を果たさなければならないという視点からも、その必要性が指摘されている(Simon, 1994)。

5. 介入方法

エンパワーメント実践の文献で、共通して示されている介入方法を次の6つに特定した：①対話、②知識と技能を教えること、③批判的意識を高揚すること、④集団の活用、⑤資源の提供、⑥アドボカシー。

(1) 対話

対話（dialogue）は、エンパワーメント実践の介入方法と位置づけられている（Bailey, 1994；Breton, 1994ab；Lee, 1995；Moreau, 1990；O'Melia et al., 1994；Simon, 1994)。対話には、ある話題についてそれぞれが意見を有している場合、双方が自分の意見を分かちあうと同時に、相手の意見を受けいれるという意味が込められている（Bailey, 1994)。真の対話には、自身や相手に対する尊厳と信頼、配慮が存在する。対話において、クライエントが自分たちの経験・世界・現実・問題について、自身の言葉で語ることが強調される（Breton, 1994ab；Lee, 1995)。一方ソーシャルワーカーには、クライエント自身が解決すべきと決めた問題を受け入れることが要求される（Cox & Parsons, 1994；Gutiérrez, 1990；Lee, 1995)。対話は、クライエントの動機づけの強化（Lee, 1995)、協働関係の樹立、クライエントの強さの強調に貢献する（Bailey, 1994；Moreau, 1990；O'Melia et al., 1994)。

(2) 知識と技能を教えること

クライエントに知識と技能を教えることは、エンパワーメントのソーシャルワークの介入方法である（Cox & Parsons, 199；Dodd & Gutiérrez, 1990；Gutiérrez, 1990；Hasenfeld, 1987；Jhonson, 1992；Parsons, 1991；Pinderhughes, 1995)。クライエントが個人、対人、政治レベルで自らの資源を発達させるのを援助する方法として、ワーカーが技能や知識を教えることは有効である（Dodd & Gutiérrez, 1990；Gutiérrez, 1990；Pinderhughes, 1995)。

技能と知識の内容はクライエントによって異なる。たとえば高齢者に必要な知識と技能として、問題解決の技能、コミュニケーション技能、加齢に伴って生じる問題や変化についての知識、社会資源についての情報、調停と交渉の技能、アドボカシーの技能が記されている（Cox & Parsons, 1994)。

クライエントに知識と技能を教える際、ワーカーはクライエントとの不均衡なパワー関係を克服しなければならない（Cox & Parsons, 1994)。ゆえに、ワーカーには指導者（instructor）というより相談者（consultant)、もしくは、促進者（facilitator）としての役割が要求される（Cox & Parsons, 1994；Dodd & Gutiérrez, 1990；Gutiérrez, 1990)。

(3) 批判的意識を高揚すること

エンパワーメント実践では、クライエントが自分の状況を社会的・政治的・経済的・文化的構造や制度と結びつけて考えることを重視し、そういった構造や制度がいかに個々人の経験に影響しているか、クライエントの認識を高める介入方法が強調されている（Breton, 1994b；Cox & Parsons, 1994；Gutiérrez, 1990,；Jhonson, 1992；Lee, 1995；Moreau, 1990；Ortiz, 1994；Parsons, 1991；Pinderhughes, 1995；Rose, 1990；Simon, 1994)。これによって、クライエントは問題や状況の原因を自己に帰したり、自分を責めるのを軽減することができる（Gibson, 1993；Gutiérrez, 1990, 1994；Jhonson, 1992；Lee, 1995；Simon, 1994；Solomon, 1976)。また、クライエントの動機づけを喚起し、行動を起こすことを可能にする（Lee, 1995；Pinderhughes, 1995)。

批判的意識の高揚には、ワーカーはまず、クライエントが問題とみなしていることや苦痛に感じていることに焦点をあてた後に、クライエントがそれらを社会的な構造と結びつけて理解できるように働きかける（Lee, 1995)。この過程で、ワーカーはクライエントが語ることに耳を傾け、支持を表明することによって、クライエントが感情を表現できるように援助する（Lee, 1995；Rose, 1990)。また、クライエントが、自分や同じ状況にある人々の、困難や問題を生起させている社会状況の知識を増やすために、情報を提供する（Jhonson, 1992；Lee, 1995；Ortiz, 1994)。さらに、社会を変えるために自身が果たす役割を、クライエントが考察するように促す（Ortiz, 1994)。

(4) 集団の活用

エンパワーメントには、集団の活用が効果的であると多くの研究者が指摘している（Breton, 1994ab；Cohen, 1994；Cox & Parsons, 1994；Gutiérrez, 1990；Lee,1995；Ortiz, 1994；Parsons, 1991；Rose, 1990)。集団での活動を通じて、個々の参加者は自分の問題は他者と共通のものであるという意識を深め、自分の問題の個人的・対人関係上の・政治的な側面を他の参加者と

ともに理解する（Cox & Parsons, 1994；Lee, 1995；Parsons et al., 1994）。これは、人々が自分を責めたり、罪の意識を持つのを軽減するのに役立つ（Cox & Parsons, 1994；Parsons et al., 1994）。さらに、人々の自己効用力感や自尊感情（self-esteem）を高めるのに大きな効果を持つ（Breton, 1994a；Parsons et al., 1994）。さらに集団は、セルフヘルプ、セルフケア、相互扶助の機会を提供するとともに、意識高揚、問題解決、知識や技能を教えること、年齢に応じた社会化を促すことにおいても効果的である（Breton, 1994a；Cohen, 1994；Cox & Parsons, 1994；Gutiérrez, 1990；Lee, 1995；Parsons et al., 1994）。ゆえに、ワーカーはグループワークを行ったり、クライエントを相互扶助グループ、セルフヘルプ、サポートグループに結びつけることが強調されている（Breton, 1994b；Guitérrez, 1990；Parsons, 1991；Pinderhughes, 1995）。

(5) 資源の提供

エンパワーメント実践では、社会資源をクライエントに提供することも必要である（Dodd & Gutiérrez, 1990；Gutiérrez, 1990；Hasenfeld, 1987；Jhonson, 1992；Moreau, 1990；Simon, 1994）。これは、クライエントのニーズに対応することはワーカーの一義的な役割であるという考えかた（Moreau, 1990）、および、資源の提供はクライエントの強さを支えるという考えかた（Meredith & Wells, 1994）に基づいている。資源の提供に際しては、クライエントが資源の利用にあたって破るかもしれない負担を軽減するように、アドボカシーを行うことが求められる（Moreau, 1990）。

(6) アドボカシー

アドボカシーもエンパワーメント実践の介入の方法である（Breton, 1994a；Browne, 1995；Cox & Parsons, 1994；Dodd & Gutiérrez, 1990；Gutiérrez, 1990；Jhonson, 1992；Moreau, 1990；Rose, 1990；Simon, 1994）。エンパワーメント実践では、ワーカーがクライエントを代表してアドボカシーを行うこと、および、ワーカーとクライエントが協働でアドボカシーを行うことの双方が必要とされている（Cox & Parsons, 1994；Gutiérrez, 1994）。ただし、ワーカー主導のアドボカシーは、クライエントのパワーの欠如した状態を強め、実践の効果を損ねてしまう可能性がある（Cox & Parsons, 1994；Solomon, 1976）。それを避けるために、ワーカーがクライエントにアドボカシーの技能を分かちあうような、あるいは、クライエントが技能を学ぶようなやり方で行うことが必要である（Cox & Parsons, 1994；Gutiérrez, 1990）。また、クライエントを組織して、アドボカシーグループをつくることも有効である（Hasenfeld, 1987）。

Ⅲ．エンパワーメント実践理論と他のソーシャルワーク理論との関連

上記のような特徴や介入方法を持つエンパワーメント実践理論は、過去提示されたソーシャルワーク実践の理論と関連づけると、どのような位置づけにあるのか。つまり、これまでの理論のどの部分と類似し、または何を補い、どこに独自性を持つのか。ギタレット（Gutiérrez, 1990）は、クライエントの現実のパワーを増すことを重視する実践理論は従来になかったと語っている。またメレディスとウェルス（Meredith & Wells, 1994）も、エンパワーメント実践は様々な点で他のソーシャルワークのモデルと異なっていると述べている。一方ブレットン（Breton, 1994a）は、エンパワーメントを志向した実践は新しいアプローチではないと記している。

他のソーシャルワークのアプローチやモデルと関係づけて、エンパワーメント実践の位置づけを示しているのは、イギリスのペイン（Payne, 1991, 1995, 1996）である。ペイン（Payne, 1996）は、過去提唱されたソーシャルワークの理論を次の3つに分類している：①個々人が既存の社会秩序に適応することによってニーズを充足することを目的とした、主に国の機関で展開され、福祉国家のサービス提供の側面を持った個人主義的－改良主義的ソーシャルワーク、②社会の不公正のために個々人のニーズが生じているという考えから既存の社会秩序に異を唱え、社会を変革する視点を強調する社会主義－集団的ソーシャルワーク、③個々人の成長と自己実現やそれを通じて社会構造を発展させることを目的とした内省的－セラ

ピー的ソーシャルワーク。そしてこの分類に基づいて、エンパワーメント実践は、①社会主義－集団的ソーシャルワークと内省的－セラピー的ソーシャルワークの一部を統合している、②ソーシャルワーカーとクライエントの援助関係について3つに分類されたソーシャルワークにはない視点を有している、という見解を示している。ここでは、ペインの考え方をもとに、他のソーシャルワークの理論と関連づけて、エンパワーメント実践理論を論じる。

1．社会主義－集団的、内省的－セラピー的ソーシャルワークを統合している部分

クライエントの状況や問題の原因を社会的要因に求め、社会制度や構造を改革することをめざしている点において、エンパワーメント実践は、社会主義—集団的ソーシャルワークと類似している。社会主義－集団的ソーシャルワークの代表であるラディカル・ソーシャルワークは、伝統的なソーシャルワークが社会問題を個人の心理的問題に還元していると批判し、社会問題が人々に問題をもたらす視点や社会改革を強調している（Langan & Lee, 1989；Payne, 1991）。他のソーシャルワークの理論においても、社会的要因が個人の問題を引き起こすことは認識されているが、その強調の程度や社会要因を軽減する介入方法がラディカル・ソーシャルワークに比べると十分ではない（Webb, 1981）。また、介入方法の1つである批判的意識の高揚も、ラディカル・ソーシャルワークで重視されている方法である（Payne, 1991）。

しかしながら、エンパワーメント実践は内省的－セラピー的ソーシャルワークの内容も含んでいる。第1に、個人の持つ強さを強調し、対話を進めるといったセラピー的手法を用いて、クライエントの情緒的な問題に対応することや（Payne, 1991）、クライエントの心理的変化を重視している。一方、ラディカル・ソーシャルワークはクライエントの情緒的な問題に対応するのが難しい（Payne, 1991）。次に、クライエント個人の変容が強調されている点は、ロジャースの影響を受けたクライエント中心のソーシャルワークが、クライエントの個人的パワーを増しその可能性を理解し利用する点と類似している（Payne, 1996）。また、クライエントの強さを強調する点は、クライエント中心理論に基づくソーシャルワーク（Rowe, 1986）、実存主義ソーシャルワーク（Krill, 1986）、認知理論に基づくソーシャルワーク（Werner, 1986）、自我理論に基づくソーシャルワーク（Goldstein, 1986）、課題中心ソーシャルワーク（Reid, 1986）、生活モデル（Germain & Gitterman, 1986）にもみられる点である。一方、ラディカル・ソーシャルワークの系譜に位置するマルクス主義ソーシャルワークでは、クライエントの強さそのものは否定しないが、強さを強調することは個人に焦点をあわすことになり、社会を変えるという視点が弱まると考えられている（Burghardt, 1986）。さらに、エンパワーメント実践理論が変化に向けてのクライエントの個人の責任を前提としている点は、自我心理学に基づくソーシャルワーク（Goldstein, 1986）や、認知理論に基づくソーシャルワーク（Werner, 1986）と一致している。

以上に示したように、エンパワーメント実践は、社会的要因によってパワーの欠如した状態にある人々を対象とした、社会改革的な志向も含めた実践ではあるが、クライエントの情緒的な問題や個人の変容、クライエントの責任や強さの強調といった、内省的－セラピー的ソーシャルワークの要素も含んでいる。その点において、ブレットン（Breton, 1994a）が述べるように、従来の理論と比べて新しい理論であるとは言えない。しかし、それぞれの要素の統合のしかたにおいて、社会主義－集団的、内省的－セラピー的ソーシャルワークと異なった内容を形成している。つまり、イデオロギー的にいえば社会主義的であるが、実際の介入においては、内省的－セラピー的な要素をも踏襲している面が特徴的といえる。

2．独自性－ワーカーとクライエント関係

ペイン（Payne, 1996）は、社会主義－集団的ソーシャルワーク、内省的－セラピー的ソーシャルワーク、個人主義的－改良主義的ソーシャルワークのそれぞれに含まれていないエンパワーメント実践の特徴として、ソーシャルワーカーとクライエントの援助関係のあり方をあげている。

エンパワーメント実践理論のように、パワーの

視点からワーカーとクライエントの関係を捉え、クライエントに比べてワーカーのもつ大きなパワーに警笛を鳴らしたのは、社会主義－集団的ソーシャルワークの代表であるラディカル・ソーシャルワークである。ラディカル・ソーシャルワークは、ソーシャルワークの専門主義は、クライエントの利益を損ね、クライエントを抑圧する社会の一部にワーカーをならしめ、クライエントの利益に反してまでも専門職としての発展を求める可能性を持つと懸念を示している。これは、クライエントを抑圧する存在としてワーカーを位置づけ、そのパワーを否定している（Payne, 1991）。

しかしながら、エンパワーメント実践理論は、パワーの視点から援助関係を捉え、ワーカーのパワーを問題にしているが、それを否定しているのではない（Payne, 1996）。ワーカーのパワーの存在を認めたうえで（Payne, 1991）、ワーカーとクライエントが協働で、援助プロセスを導くことを提言しているのである。そのためにクライエント自身の力を伸ばしたり、サービスや組織を再編成することによって、クライエントとワーカーやサービス提供側とのパワーを均衡に近づけようとするのは、前述したとおりである。エンパワーメント実践は、パワーの視点から援助関係を考察する点において社会主義－集団的ソーシャルワークの影響を受けたが、ワーカーのパワーを否定することは引き継いでいない。

内省的－セラピー的ソーシャルワークでは、クライエントとワーカーのパワー関係や対等なパートナーとしての存在がそれほど意識されていない。たとえば行動理論、学習理論、認知理論に基づくソーシャルワークでは、ワーカーの専門性を利用することが実践のなかで重視される（Payne, 1995）。課題中心ソーシャルワークで言及されているワーカーとクライエント関係は「クライエントが解決すべき問題を決める」という点において、エンパワーメント論に似ているともいわれているが（Fisher, 1994）、たとえばリッド（Reid, 1986）の課題中心ソーシャルワーク論を見ると、パワーの視点から両者の関係を考察したうえで、その必要性が訴えられているわけではないことは明らかである。また、初期の生活モデルにおいても、ワーカーとクライエントのパワーの差がもたらす影響について意識されていないこと（Hasenfeld, 1987）や、システム論に基づくソーシャルワークも専門家主義に陥る可能性のあることが（渡辺, 1995）指摘されている。

また、エンパワーメント実践理論のめざすワーカーとクライエントの援助関係は、個人主義的－改良主義的ソーシャルワークの援助関係とは相容れないものである。個人主義的－改良主義的ソーシャルワークは、機関やワーカーのパワーに価値を見出し、それを利用した実践を志向している。さらに、パワーを持った専門職としてのソーシャルワーカーがクライエントにもたらす問題が看過されている（Payne, 1996）。

以上の議論から、ソーシャルワーカーとクライエントの関係について、エンパワーメント実践理論が新しい視点を有していることは明らかであろう。クライエントとワーカーの均衡のとれた関係樹立のためにという点において、ギタレット（Gutiérrz, 1990）が述べているように、クライエントのパワーを増やす実践理論はなかったと言える。こうしたワーカーとクライエントのパワーの共有、すなわち、クライエントのエンパワーメントによって協働関係を樹立するという考え方は、フェミニスト・ソーシャルワークと非差別的実践の影響を受けていると言われている（Payne, 1996）。

Ⅳ．エンパワーメント実践理論の問題点

従来のソーシャルワークのアプローチやモデルで欠けている部分を補っている点において、エンパワーメント実践理論の意義が明らかになった。また日本でも、1995年度の『ソーシャルワーク研究』誌上をはじめとして、日本のソーシャルワークにおけるエンパワーメント実践の意義が論じられている。しかし、エンパワーメント実践理論一般に内在する限界や問題点、さらに、この実践理論を日本で適用するにあたっての問題点については、十分検討されていないように思われる。

ゆえにここでは、日米英といった国の違いを問わずエンパワーメント実践理論一般に内在した問題点として以下の①②を、日本に適用するにあたっての問題点として③をあげ、説明する：①ク

ライエントの困難や状況の一義的な原因を社会構造に求めることは、クライエントの全体性を理解できない可能性があること、②政治レベルでのエンパワーメントを強調することは、政治的パワーを発揮できなかったり、望まないクライエントがいる可能性を無視していること、③北米のソーシャルワーカーとクライエントのパワーの差の発生の仕方やあり方の議論を日本にそのままあてはめることはできないこと。エンパワーメント実践理論は日本でも意義があると考えられるが、日本の実践現場でエンパワーメントに基づくソーシャルワーク実践が実際に行われるには、以上の3点を課題として検討し、今後、既存のエンパワーメント実践理論を修正していかなければならない。

1．慢性疾患を持つ人々の困難の原因について

エンパワーメント実践では、クライエントの困難や状況の一義的な原因を社会構造やシステムに求めているが、この視点ではクライエントの全体性を把握できない可能性がある。アメリカのエンパワーメント実践の中心的論者の1人であるサイモン（Simon, 1994）は、エンパワーメント実践は慢性疾患を持つ人々にも有効であると述べている。確かに慢性疾患を持つ人々は、社会資源の不備から不利益を被ったり、病院や医師との関係においてパワーの欠如した状態にあるので、エンパワーメントに基づく実践は適しているかもしれない。しかし、外的要因のみを慢性疾患を持つ人々のパワーの欠如の原因とみなすのは、これらの人々の全体性を見ていない。

慢性疾患を持つ人々は、疾病そのものから生じる精神的、肉体的苦痛や問題を抱えている（ストラウスほか，1988）。つまり、病気という個人内部の困難に起因する問題である。慢性疾患を持つ人々の場合は、こういった疾病がもたらす困難と外的要因が複合して、人々に困難な状況がもたらされると考えられる（児島，1991；杉本，1981）。疾病そのものに起因する苦痛や不安を考慮せず、社会環境を状況や問題の原因とみなすことは慢性疾患を持つ人の現実や全体性をみていない。

クライエントによっては、社会の制度やシステムと同時に、たとえば疾病という他の要因も複合して、困難な状況に陥る可能性があるということを視野にいれなければならない。慢性疾患を持つクライエントに対してエンパワーメントに基づく実践を行うためには、社会の構造やシステムといった外的要因のみならず、疾病という要因も含めた理論化をする必要があるだろう。

2．政治レベルのエンパワーメントを強調することにかんして

エンパワーメント実践では、クライエントの政治レベルでのエンパワーメントを助けることが実践の望ましい目標と考えられているが、これは、政治的パワーを発揮できなかったり望まないクライエントがいる可能性を無視している。エンパワーメント実践理論は、自分の生活にパワーを発揮するだけの十分な能力を有さない人々について語っていない。この点についてペイン（Payne, 1991）は、政治レベルでのエンパワーメントを強調することは、すべての人々が高いレベルでエンパワーメントを達成することができるかのように、ワーカーがふるまう可能性を秘めていると指摘している。例えば、脳血管障害によって、肉体レベルだけでなく意識レベルも低下した人たちに、政治レベルでのエンパワーメントは可能なのだろうか。不安定なまたは悪化する疾病の症状に苦悩し心理的に不安定になっている人が、政治的エンパワーメントを意識することはできるのだろうか。

ソーシャルワークの価値には、人々が社会改革に参加するのを促すという内容も含まれているので（Levy, 1973, 1976、Reamer（1995）の中で引用）、ワーカーがクライエントのエンパワーメントや社会改革への参加を促すことは、ソーシャルワークの価値に反することではない。しかし、クライエントの個別性や自己決定という他の価値をも考慮に入れると、クライエントの意志を考慮せずにエンパワーメントを進めることは、ソーシャルワークの価値にはあわない。

個人の幸福と社会改革に奉仕することはソーシャルワークの価値である（Reamer, 1995）から、ワーカーはクライエントのミクロからマクロレベルのエンパワーメントまでを視野にいれて援助活動に携わるべきである。しかし、援助の目標はミクロからマクロレベルの複数あり、最終的に

どのレベルでエンパワーメントしたいかはクライエントが決めるということを、改めて強調すべきである。これはソーシャルワークにおいては当然の原則であるが、北米のエンパワーメントの文献の多くで、この点は明確に記されていない。政治レベルのエンパワーメントを高次の目標と位置づけている論者が多いゆえに、一層強調しておかなければならない。

3．日本のソーシャルワーカーや社会福祉職とクライエントのパワーの差にかんして

前述したように、ソーシャルワーカーとクライエントの関係はエンパワーメント実践理論の重要なトピックスであるが、日本においても、エンパワーメントを論じた北野（1995）、久保（1995）、渡辺（1995）のほか、宮川（1989）、平塚（1986）らによって、ワーカーのパワーがクライエントのエンパワーメントを阻害する可能性や、両者のパワーの共有に類する議論が展開されている。しかし、日本のワーカーや社会福祉職とクライエントのパワーの差の発生の仕方やあり方、さらに、それを克服する方法がアメリカとは異なるのではないか、という点が検討されていない。日米のコミュニケーション様式の違いと専門職としてのソーシャルワーカーの位置づけの違いを考慮すると、日本のワーカーとクライエント間のパワーの差の発生の仕方やあり方は、アメリカの場合とは異なると考えられる。

まず日米のコミュニケーション様式の違いから、ワーカーとクライエントのパワー関係を検討しよう。欧米社会においては、互いの利得的意志を明確に表明・伝達するコミュニケーションや（濱口，1988）、自他の差異を顕在化させたコミュニケーション様式がとられ、それゆえに、社会的な対立を惹起する可能性を含んでいる（正村，1995）。一方日本人は、こういった欧米社会のコミュニケーション様式をとらず、むしろ自他の差異を隠蔽し対立を回避させるしくみを発達させてきたが（正村，1995）、これはその背後でおさえられている対人関係の葛藤の存在を示唆している。

これを説明するのが、恥と義理（正村，1995）、共感（中村，1990）の概念である。恥や義理、共感を重んじて、自分の真意を明確に表現しないために、相手がメーッセージを誤って受け取る。そして、相手がメッセージに含まれた真意を誤解しても、それを明言できないために葛藤を感じたり、逆に自分の行動を規制する。このとき、対人関係におけるパワーの違い存在する。これは、日本的なコミュニケーション様式が、対人関係におけるパワーの差を招来する素となる可能性を示している。恥や義理、共感といった日本の特性を視野に入れると、日米の対人関係におけるパワー関係の様相は違ったものになるといえよう。

文化の影響を受けずしてソーシャルワークは存在しないので（Payne, 1991；Reamer，1995）、この一般的な議論は、日本のソーシャルワーク実践においてもあてはまるだろう。たとえば村田（1995）も、日本と欧米の文化の違いを指摘し、日本のソーシャルワーク実践の現場では、よい人間関係を維持するための配慮が働き、クライエントが本当に自己決定しない可能性がある、と述べている。たとえワーカーがクライエントの自己決定や参加を十分考慮して援助を進めたとしても、クライエントがワーカーに遠慮や配慮して自分の意図と一致しない方向に進む可能性がないとはいえない。コミュニケーションにまつわる日本の特性を加えてワーカーとクライエント関係を考察すると、日本のワーカーとクライエントのパワーの差の発生の仕方は、アメリカの場合とは異なるということが考えられる。

さらに、専門職としてのソーシャルワーカーの位置づけから日米のワーカーとクライエントのパワー関係を分析しても、その様相は違ったものになると考えられる。専門職としてのソーシャルワーカーの位置づけは、日本とアメリカではかなり異なる。日本のソーシャルワークでは、アメリカやイギリスのワーカーが1950年代から努めていた専門職団体の統合や理論的基盤の確認がなされていない（伊藤淑子，1996；西原，1990）。社会的な認証制度については、社会福祉士という資格はあるが、業務独占ではなく名称独占である。また、日本の社会福祉職の間では早くから学会・研究活動が行われてきた医療分野のソーシャルワーカーは（伊藤淑子，1996）、社会福祉士に含まれず、資格制度は未だ確立していない。さらに、ソーシャルワーカーの倫理綱領についても、日本の代表的

な倫理綱領である日本ソーシャルワーカー協会の倫理綱領も、全米ソーシャルワーカー協会の倫理綱領と比べると抽象的である（西原，1990）。

一方、アメリカの場合は、専門職団体の統合、理論的基盤の確認、具体的な倫理綱領の作成が遂げられている。さらに、ソーシャルワーカーが対応する領域やその重要性も、他国とはくらべものにならないほど大きい（伊藤淑子，1996）。国家資格化はなされていないが、州によって資格が付与されている。そして、強力な専門職団体である全米ソーシャルワーカー協会が、ソーシャルワーク学士・修士取得者にたいし、全米ソーシャルワーカー協会員の資格を付与している。しかも、学士取得のソーシャルワーカーの専門能力が疑問視され、準専門職として位置づけられているほどである（伊藤淑子，1996）。

日米のソーシャルワーカーの専門職としての位置づけを比べると、アメリカのソーシャルワーカーのほうがはるかに強固といえるだろう。エリート主義と呼ばれるほど、専門職としてのパワーをもつソーシャルワーカーの活動する国でのクライエントとワーカーのパワーの議論は、日本にそのままあてはまるのだろうか。専門職として強固なパワーをもったワーカーとクライエントのパワー関係の様相は、専門職としての基盤が弱いワーカーとクライエントの場合と異なると考えられる。日本のワーカーとクライエント関係のパワーを考慮するうえで、専門職としての位置づけの違いは、視野に入れなければならない第2の点である。

以上を要約すると、日米両国のコミュニケーション様式と、専門職としてのソーシャルワーカーの位置づけが異なるので、日本のワーカーとクライエントのパワーの違いの発生の仕方、または、あり方は、アメリカの場合と異なると考えられる。そしてワーカーとクライエントのパワーの差のあり方や生じ方が違うということは、畢竟、それを克服する方法も異なるのではないだろうか。ソーシャルワーカーとクライエントの関係や、協働関係・パートナーシップの樹立はエンパワーメント実践理論の中心的なトピックスであるので、日本の実践現場でワーカーや社会福祉職とクライエントの協働関係やパワーの共有の達成の具体的な方法についてさらに検討し、既存のエンパワーメント実践理論を修正する必要があるだろう。

おわりに

エンパワーメント実践理論は日本でも意義あるものと考えられるが、日本の実践現場でエンパワーメントに基づくソーシャルワーク実践が行われるには、クライエントの困難の原因やめざすべき実践のゴールにかんして理論の幅を広げ、また、日米のソーシャルワークの違いを考慮し、アメリカを中心としたエンパワーメント実践理論の修正を試みることが必要である。特に、問題点の部分で示した、クライエントの外的要因のみならず疾病という要因も複合してクライエントにもたらされる困難な状況や、日本のソーシャルワーカーや社会福祉職とクライエントの協働関係達成の方法を具体的に理論化していかなければならない。ただしソーシャルワーカーとクライエントの関係は、実践分野によって異なることに留意しなければならない。たとえば、生活保護のケースワーカーのように、官僚機構のなかに位置し法的に付与されたパワーを持つ職種と、医療ソーシャルワーカーのように、資格もなく診療報酬上も十分に評価されていない職種とでは、パワーの視点から見たクライエントと援助者の関係は違ったものになると考えられる。社会福祉実践のそれぞれの分野で、クライエントと援助者の関係と協働関係樹立の方法を検討することが必要であろう。また、日本ではエンパワーメント実践の内容の紹介や概念の研究はかなり進んでいるが、実践現場のなかでこの理論に基づく実践を行ったうえでの限界点や問題点は検討されていないので、この点についても明らかにしていかなければならない。

【参考・引用文献】

Adams, R. (1996). *Social work and empowerment*. London : Macmillan.

Baily, D. (1994). Organizational empowerment : From self to interbeing. In L. Gutiérrez & P. Nurius (Eds.), *Education and research for empowerment practice* (pp. 37–44). Seattle : University of Washington.

Bombyk, M. (1995). Progressive social work. In R. L. Edwards (Ed.), *The encyclopedia of social work* (19th ed.) (pp. 1933–1942). Washington, DC : National Association of Social Workers.

Breton, M. (1994a). Relating competence-promotion and empowerment. *Journal of Progressive Human Service, 5,* 27–44.

————. (1994b). On the meaning of empowerment and empowerment-oriented social work practice. *Social Work with Groups, 17,* 23–37.

Bricker-Jenkins, M., & Lockett, P. W. (1995). Women : Direct practice. In R. L. Edwards (Ed.), *The encyclopedia of social work* (19th ed.) (pp. 2529–2539). Washington, DC : National Association of Social Workers.

Browne, C. V. (1995). Empowerment in social work practice with older women. *Social Work, 40,* 358–364.

Burghardt, S. (1986). Marxist theory and social work. In F. J. Turner (Ed.), *Social work treatment* (3rd ed.) (pp. 590–618). New York : The Free Press.

Cohen, M. B. (1994). Overcoming obstacles to forming empowerment groups : A consumer advisory board for homeless clients. *Social Work,39,* 742– 748.

Cowger, C. D. (1994). Assessing client strengths : Clinical assessment for client empowerment. *Social Work, 39,* 262–268.

Cox, E. O., & Parsons, R. J. (1994). *Empowerment-oriented social work practice with the elderly.* Pacific Grove, CA : Brooks/Cole.

Dodd, P., & Gutiérrez, L. M. (1990). Preparing students for the future : A power perspective on community practice. *Administration in Social Work, 14,* 63–78.

DuBois, B., & Miley, K. K. (1995). *Social work : An empowering profession* (2nd ed.). Needham Heights, MA : Allyn & Bacon.

Fisher, M. (1994). Partnership practice and empowerment. In L. Gutiérrez & P. Nurius (Eds.), *Education and research for empowerment practice* (pp. 273–290). Seattle : University of Washington.

Germain, C. B., & Gitterman, A. (1986). The life model approach to social work revisited. In F. J. Turner (Ed.), *Social work treatment* (3rd ed.) (pp. 618–644). New York : The Free Press.

————. (1995). Ecological perspective. In R. L. Edwards (Ed.), *The encyclopedia of social work* (19th ed.) (pp. 816–827). Washington, DC : National Association of Social Workers.

Gibson, C. M. (1993). Empowerment theory and practice with adolescents of color in the child welfare system. *Families in Society, 74,* 387–396.

Goldstein, E. (1986). Ego psychology. In F. J. Turner (Ed.), *Social work treatment* (3rd ed.) (pp. 375–406). New York : The Free Press.

Gould, K. H. (1987). Life model versus conflict model : A feminist perspective. *Social Work, 32,* 346–351.

Gutiérrez, L. M. (1990). Working with women of color : An empowerment perspective. *Social Work, 35,* 149–154.

————. (1994) Beyond coping : An empowerment perspective on stressful life events. *Journal of Sociology and Social Welfare, 21,* 201–219.

Gutiérrez, L. M., DeLois, K. A., & GlenMaye, L. J. (1995). Understanding empowerment practice : Building on practitioner-based knowledge. *Families in Society, 75,* 534–542.

濱口恵俊（1988）『「日本らしさ」の再発見』、講談社.

Hartman, A. (1993). The professional is political. *Social Work, 38,* 365–366 504.

Hasenfeld, Y. (1987). Power in social work practice. *Social Service Review, 61,*469–483.

平塚良子（1986）「社会福祉におけるクライエント認識に関する一考察」『社会福祉学』、27巻、pp. 75–101.

堀勝洋（1995）「社会保障及び社会福祉のパラダイム転換」『社会福祉学』,36巻、pp. 1–14.

Howe, D. (1994). Modernity, postmodernity and social work. *British Journal of Social Work, 24,* 513–532.

伊藤るり（1993）「〈新しい社会運動〉論の諸相と運動の現在」山之内靖ほか（編）、『社会科学の方法Ⅷシステムと生活世界』、pp. 121–158.

伊藤周平（1996）『福祉国家と市民権：法社会学的アプローチ』、法政大学出版局.

伊藤淑子（1996）『社会福祉職発達史研究』、ドメス出版.

Jhonson, L. (1992). *Social work practice : A generalist approach.* Needham Heights, MA : Allyn & Bacon.

北野誠一（1995）「ヒューマンサービス、エンパワーメントそして社会福祉援助の目的」『ソーシャルワーク研究』、Vol. 21 No. 5, pp. 36–47.

児島美都子（1991）『新医療ソーシャルワーカー論』、ミネルヴァ書房.

Kondrat, M. E. (1995). Concept, act, and interest in professional practice : Implications of an empowerment perspective. *Social Service Review, 69,* 405–427.

Krill, D, F. (1986). Existential social work . In F. J. Turner (Ed.), *Social work treatment* (3rd ed.) (pp. 181–218). New York : The Free Press.

久保美紀（1995）「ソーシャルワークにおけるエンパワーメント概念の検討」『ソーシャルワーク研究』、Vol. 21 No. 5, pp. 93–106.

窪田暁子（1995）「アルコール依存者の回復をエンパワーメントの視点からみる」『ソーシャルワーク研究』、Vol. 21, No. 5, pp. 11–20.

Laird, J. (1995). Family-centered practice in the post-modern era. *Families in Society, 76,* 150–162.

Langan, M., & Lee, P. (1989). Whatever happened to radical social work? In M, Langan & P, Lee (Eds.), *Radical social work today* (pp. 1–18). London : Unwin Hyman.

Lee, J. A. B. (1995). *The empowerment approach to social work practice.* New York : Columbia University Press.

正村俊之（1995）『秘密と恥』、勁草書房 .

Meredith, S. D., & Wells, L. (1994). An empowerment perspective : A key factor in meeting the challenge of gerontological social work. In L. Gutiérrez & P. Nurius (Eds.), *Education and research for empowerment practice* (pp. 137–148). Seattle : University of Washington.

Mickelson, J. S. (1995). Advocacy. In R. L. Edwards (Ed.), *The encyclopedia of social work* (19th ed.) (pp. 271–297). Washington, DC : National Association of Social Workers.

宮川数君（1989）「アドボカシーの思想」大塚達雄・阿部志郎・秋山智久（編）『社会福祉実践の思想』、ミネルヴァ書房、pp. 56–68.

Moreau, M. J. (1990). Empowerment through advocacy and consciousness –raising : Implications of a structural approach to social work. *Journal of Sociology and Social Welfare, 17,* 53–67.

村田久行（1996）「社会福祉実習教育の理念についての一考察－「個」の形成と確立を求めて」『日本社会福祉実践理論学会研究紀要』、4, pp. 17–31.

中村牧子（1990）「義理と共感：近現代日本における人間関係の一位相」『ソシオロゴス』、14号 , pp. 19–35.

Neil, T. (1997). Anti-discriminatory practice. In M. Davies (Eds.), *The Blackwell companion to social work* (pp. 238–244). Oxford : Blackwell Publishers.

西原雄次郎（1990）「社会福祉援助技術の専門性と倫理」岡本民夫・小田兼三（編）『社会福祉技術総論』、ミネルヴァ書房、pp. 86–105.

O'Melia, M., DuBois, B., & Miley, K. (1994). From problem solving to empowerment- based social work practice. In L, Gutiérrez & P, Nurius (Eds.), *Education and research for empowerment practice* (pp. 161–170). Seattle : University of Washington.

Ortiz, L. P. A. (1994). Bridging cause and function : A troubles based social action model. In L, Gutiérrez & P, Nurius (Eds.), *Education and research for empowerment practice* (pp. 115–126). Seattle : University of Washington.

Parsons, R. J. (1991). Empowerment : Purpose and practice principles in social work. *Social Work with Groups, 14,* 7–21.

Parsons, R. J., & East, F. J., & Boesen, M. B. (1994). Empowerment : A case study with AFDC women. In L, Gutiérrez & P, Nurius (Eds.), *Education and research for empowerment practice* (pp. 259–272). Seattle : University of Washington.

Parton, N. (1994).'Problematics of government', (post) modernity and social work. *British Journal of Social Work, 24,* 9–32.

Payne, M. (1991). *Modern social work theory.* Chicago : Lyceum.

————. (1995). *Social work and community care.* London : Macmillan.

————. (1996). *What is professional social work?* Birmingham : Venture Press.

Perkins, K., & Tice, C. (1995). A strengths perspective in practice : Older people and mental health challenges. *Journal of Gerontological Social Work, 23,* 83–97.

Pinderhughes, E. (1983). Empowerment for our clients and ourselves. *Social Casework, 64,* 214–219.

————. (1994). Empowerment as an intervention goal : Early ideas. In L. Gutiérrez & P. Nurius (Eds.), *Education and research for empowerment practice* (pp. 17–30). Seattle : University of Washington.

————. (1995) . Empowering diverse populations : Family practice in the 21st century. *Families in Society, 76,* 131–140.

Poole, D. L. (1995). Partnerships buffer and strengthen. *Health and Social Work, 20,* 2–4.

Popple, P. R., & Leighninger, L. (1993). *Social work, social welfare, and American society* (2nd ed.). Needham Hights, MA: Allyn & Bacon.

Pray, J. E. (1991). Respecting the uniqueness of the individual : Social work practice within a reflective model. *Social Work, 30,* 80–85.

Reamer, F. G. (1995). *Social work values & ethics.* New

York : Columbia University Press.

Reid, W. J. (1986). Task-centered social work . In F. J. Turner (Ed.), *Social work treatment* (3rd ed.) (pp. 267-295). New York : The Free Press.

Richan, W. C. (1994). Empowering social work students. In L, Gutiérrez & P, Nurius (Eds.), *Education and research for empowerment practice* (pp. 59-72). Seattle : University of Washington.

Rose, S. M. (1990). Advocacy/empowerment : An approach to clinical practice for social work. *Journal of Sociology and Social Welfare,17,* 41-51.

————. (1994). Reclaiming empowerment : A paradigm for social work. In L. Gutiérrez & P. Nurius (Eds.), *Education and research for empowerment practice* (pp. 31-36). Seattle : University of Washington.

Rowe, W. (1986). Client-centered theory. In F. J. Turner (Ed.), *Social work treatment* (3rd ed.) (pp. 407-431). New York: The Free Press.

Saleebey, D. (1996). The strengths perspective in social work practice : Extensions and cautions. *Social Work , 41,* 296-305.

Simon, L. B. (1990). Rethinking empowerment. *Journal of Progressive Human Services, 1*, 27-39.

————. (1994). *The empowerment tradition in American social work.* New York : Columbia University Press.

Solomon, B. B. (1976). *Black empowerment : Social work in oppressed communities.* New York : Columbia University Press.

Staples, L. H. (1990). Powerful ideas about empowerment. *Administration in Social Work, 14,* 29-42.

ストラウス A. ほか　南裕子（監訳）(1988)『慢性疾患を生きる』、医学書院 (Strauss, A et al. 1984. *Chronic Illness and the Quality of Life* (2nd ed.). Saint Louis : Mosby Company.)

杉本照子（1981）『医療社会福祉学入門』、医学書院.

渡辺洋一（1995）「エンパワーメントを志向したソーシャルワークに関する一考察－社会　福祉の固有性の視点から－」『ソーシャルワーク研究』、Vol. 21 No. 5, pp. 28-35.

Webb, D. (1981). Themes and continuities in radical and traditional social work. *British Journal of Social Work, 11,* 143-158.

Weick, A. (1982). Issues of power in social work practice. In A. Weick & T. Vandiver (Eds.), *Women, power and change* (pp. 173-185). Washington, D. C : National Association of Social Workers.

Weick, A., Rapp, C., Sullivan, W. P., & Kisthardt, W. (1989). A strengths perspective for social work practice. *Social Work, 34,* 350-354.

Werner, H. D. (1986). Cognitive theory. In F. J. Turner (Ed.), *Social work treatment* (3rd ed.) (pp. 91-130). New York : The Free Press.

山之内靖　(1996)『システム社会の現代的位相』、岩波書店 .

A Study of Empowerment-based Social Work Practice

ABSTRACT

The concept of empowerment in social work has become popular, but the discussion of empowerment is complex and varied. Many authors approach empowerment--based practice from their own perspectives and ideologies, so no common framework has been established. Furthermore, the critical analysis of empowerment theories is underdeveloped . The purpose of this study is first to identify the essence of empowerment-based practice. Reviewing the literature on empowerment social work in North America and Britain, the author discusses backgrounds, necessary elements and intervention methods of empowerment-based practice, and the linkage between empowerment-based practice and other social work theories. Secondly, based on understanding the essence of empowering practice, the author analyzes the problems with empowerment-based practice theory. The difficulty in applying empowering practice to social work practice fields in Japan is also described.

Key words : Empowerment, Social Work , Helping Relationship